

米澤 晋之助 学位（博士）請求論文審査報告書 論文題目：慶林坊日隆教学の研究

本論文は、日蓮聖人（1222—82）の教学を源流として、聖人滅後の日蓮宗教学史上、室町時代を代表する八品門流の祖、慶林坊日隆（1385—1464）の教学思想を究明することを目的としている。日蓮宗教学史の視点から、日隆教学を検討した先行研究としては、執行海秀著『日蓮宗教学史』、望月歆厚著『日蓮宗学説史』があり、また八品門流の教学に関する研究者としては、苅谷日任、株橋日涌、泉日恒、大平宏龍等の先師が存在している。これらの研究の要点を列示すると、（1）日隆は四条門流（京都妙顕寺）で出家するも、当時の貫首の弘教のあり方に疑問を抱いて退出し、諸学研鑽ののちに、布教伝道に専心し、尼崎本興寺・京都本能寺をはじめとして新たな寺院の建立と、改宗・転派の寺院を創出していること、（2）日隆は、50歳以降、多くの著書を著し、80歳で入滅するまで、その数量はおよそ300巻に及んでいること、（3）それらの述作意図は、日蓮聖人教学の核をなす本門思想の独自性を明確にすることであって、聖人教学の母胎となっている天台教学との分別（台当異目）に主眼が置かれていること、（4）日隆の日蓮教学研鑽の態度は、日蓮聖人の代表的著作である『観心本尊抄』を中心として、今日の文献学的な視点から考察すると、日蓮聖人の真蹟遺文を重視していること、（5）日隆は、日蓮遺文を第一義の立場に置き、天台三大部の本末である六大部を第二義とする立場から、教学思想を展開していること、（6）日隆は、法華經本門思想の立場から、末法衆生の救済論を展開しているが、それは「本門八品上行所伝本因妙下種の題目」の受持を要諦とし、教学思想を体系化していること、などが指摘できる。

以上、日隆教学研究の要点を列記したが、論者はこれらの先行研究を確認しつつ、日隆教学の特徴でもある「一仏二名論」の成立論について、新たな視点から検証し、さらに中古天台教学と日隆教学の連関性について、日隆が日本中古天台教学と深い連関性があることを実証しつつ、その場合、日蓮教学の立場から中古天台教学への批判的立場が見られると同時に、一方では日蓮教学の立場から中古天台教学に対する、新たな解釈をほどこして論を展開していることを、指摘している。これらの指摘は、先行研究においては未開拓であり、論者の新知見であると言えよう。新知見を開示できた由来は、論者の日隆教学研鑽の方法が、日隆に直参しつつ、日隆の代表的著作である『法華宗本門弘経抄』全117巻を基軸としながら、日隆の他の著作を閲読し、細密に引用文献を精査することによって、日隆教学の思想を究明しようとした態度によるものである。ここに、論者における研究の方法論の妥当性がうかがえる。

本論文は、全五章から構成されている。

第一章「日隆の略伝と教学研鑽の方法」は、二節からなる。第一節「日隆の略伝」では、日隆の少ない伝記を補強することに力点を置いて、日隆の教化活動、著作活動、日隆の帰属する門流表記に着目し、三項目から考察を加えている。それによって、布教活動の面では日隆が新たな寺院を建立し、また教化活動によって転宗・転派させた寺院は、都合18箇寺であることを確認している。また、著作活動の面では、日隆は300巻に近い著書を述作しているが、そのほとんどは、52歳以降の執筆であることを明らかにしている。また、日隆は四条門流に帰属し、のちに分立してゆくのであるが、その立場は、自己の正統性を日蓮、日朗、日像等の法脈を継承する者であることに置き、尼崎流の正嫡性を主張していることにある、と指摘している。第二節「日隆の教学研鑽の方法」では、日隆教学が形成されるにあたり、①広学主義の否定、②日蓮遺文中心主義、③『観心本尊抄』を中心とする教学の構築化、④天台三大部本末の六大部を第二義的に位置づけ、日本の中古天台文献に対しては、日蓮遺文からの新たな解釈によって、その教義を依用する立場と、反対に激しく批判する立場の両面が見られること、などを明らかにしている。とくに、日隆は、③の立場を力説することによって、②の日蓮遺文の拝読を勧奨し、門下に対して、日蓮教学と天台教学との違いを明確にするように強調していたことを明らかにしている。

第二章「『法華宗本門弘経抄』述作と『三百帖』との関連性」では、第一節「述作次第をめぐる問題」において、従来『弘経抄』の執筆は、「嘱累品」の解釈からはじまる、との説が存したが、第一項「金剛院日承著『広経抄』の検討」、ならびに第二項「『法華宗本門弘経抄』に引用の日隆の著作」の両面から検討することによって、この説は、妥当ではないことを検証している。また、『弘経抄』117巻の述作には順序次第が存するのではないか、という考え方に対しても、本書を細密に検討することによって、日隆は各品を同時進行的に解釈を加え、執筆していたのではないか、との仮説を提示している。第二節「『法華宗本門弘経抄』と『三百帖』との関連性」では、中古天台における『三百帖』は初学者のための入門書であるが、その著作が、日隆自身の著作中にいかに引用されているのかを検討した結果、『十三問答抄』に1箇所、『弘経抄』では228箇所、『開迹顕本宗要集』では16箇所の引用があることを明らかにしている。その引用意図は、日隆自身の教学の研鑽のみならず、門下の教育のための資料として引用しているのではないかと指摘している。

第三章「日隆の教学思想概観」は、先行研究を基礎としつつ、第一節「本門八品正意論」では、日隆が本門八品を重視し、本門の一品二半との対比においては、末法の付嘱論、救済論の解釈の違いから、八品を正意としていた立場を鮮明にしている。第二節「付嘱論」では、別付嘱と総付嘱の両面から考察し、上行付嘱の立場から、別付嘱・総付嘱の両者の不離を論じている。第三節「機根論」では、本已有善

と本未有善の立場から考察し、末法の衆生は本未有善であることから、本門八品による仏種の下種が不可欠であることを論証している。第四節「三益論」では、末法の衆生成仏は上行菩薩に付嘱された妙法五字の受持信行の必要性を実証し、本門八品における妙法五字の信行が成仏の道であることを論じている。第五節「時間論」では、法華の教相として十双歎、すなわち二十の大事が指摘されているが、その中で時間論としては三五の二法があり、その三五塵点の解釈においては、因位を上行菩薩に、果位を釈尊に配し、塵点劫実説を強調していたことを明らかにしている。なお、これらの五節にわたる教学思想の項目は、日隆教学の中枢に位置するものであるから、今後、さらに日蓮聖人教学との関連性のうえで、考察が深められることを期待する次第である。

第四章「一仏二名論の展開」では、五節に分けて考察を進めている。日隆の末法衆生救済論の構造は、本果妙の釈尊が、本因妙の上行菩薩の姿をもって、仏種の南無妙法蓮華経を譲与するというものである。ここに、釈尊と上行菩薩とは「一仏二名」という形が提示されるのであって、釈尊即上行・上行即釈尊と規定されている。その根拠を、究明することが本章の目的で、多くの典籍を渉猟することによって、日隆教学の独自性を明らかにしている。第一節「日隆著述にみる「一仏二名」の表記」においては、日隆の著作中、13箇所での表記があり、それと類似した表現として4箇所を抽出している。第二節「日隆以前にみる「一仏二名」の表記」では二師を指摘し、第三節「日隆以降にみる「一仏二名」の表記」では、日蓮教学史上、八師の著作からそのことを指摘し、第四節「天台宗諸師の著述にみえる「一仏二名」の表記」では、天台宗の学匠十師の著作からその用例を確認している。第五節「諸宗派諸師の著述にみえる「一仏二名」の表記」では、日本仏教史上の四師の著作に、その表記があることを確認している。その結論としては、日隆以前においては、等覺・妙覺の一仏二名、あるいは大日如来と釈尊を一仏異名とするが、日隆が釈尊・上行を一仏二名としたことに独自性があることを指摘している。そして、日隆以降では、大石寺教学の「日蓮本仏論」成立に影響を与えていることを示唆している。

第五章「日隆にみる日本天台教学批判とその影響」は、従来、日隆教学と日本天台宗の教学者である円仁・円珍・安然等の教学との関連性と、日隆の中古天台教学批判については、まったく論じられてこなかった点に着目して論を展開している。論者は、第一節「日隆にみる慈覺大師円仁批判」、第二節「日隆にみる智証大師円珍批判」、第三節「日隆にみる五大院安然批判」の三節を立て、日隆著作中にみられる三師の著作からの引用文を整理し、検討を加えている。その数は、円仁著作中から63箇所、円珍著作中から77箇所、安然著作中から285箇所の文を抽出している。日隆が、自己の著作中に、これほど多く引用していながら、天台大師・妙楽大師の天台六大部からの影響は指摘はされているものの、日隆の日本天台教学

研鑽については、全く未開拓であったことを物語っている。その内容については、今後、さらに研究が進められねばならない。しかし、論者はこれらの引用文を整理することによって、日隆が日蓮義の立場から解釈する場合と、逆に教観相資の立場から、あくまでも中古天台義を批判している場合とがあることを指摘している。

以上、本論文は、膨大な巻数を持つ日隆の著作に向き合い、それぞれの課題に従って、検証していることが確認できる。すなわち、(1) 日隆の生涯と著作活動の面を実証的に捉え、また(2) 『法華宗本門弘経抄』117巻の特徴と中古天台の教学書である『三百帖』の連関性を究明し、(3) 日隆教学の課題をよく整理し、さらに(4) 日隆教学の根幹ともいべき「一仏二名論」成立の背景と、その後の影響を検証し、(5) 従来ほとんど論じられてこなかった平安時代の日本天台宗の学匠で、密教思想を天台教学に摂り入れた円仁・円珍・安然等の教学思想を、日隆がいかに関心しているかを、日隆の著作中の引用文を抽出することによって、検証しようとしている。これらのことは、日本中古天台教学を分離しては、決して日隆教学の全体像を描くことはできない、ということの指摘である。つまり、論者は、従来の日隆教学研究の方法を継承しながら、新たな研究方法の端緒を開いたことになるのである。そのことから、本研究は、今後の日隆教学研究のみならず、日蓮宗教学史研究に大いに寄与するものであると評価できる。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、平成28年1月28日に公聴口頭試問をおこない、論者の向学とその力量の確実なることを確認した。

よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいと審査委員会は判断し、これを認定する。

平成28年2月25日

主査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 北川 前肇
副査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 庵谷 行亨
副査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 原 慎定